



宮嶋資夫年表

一八八六（明治一九）年 一歳

八月一日、東京四谷伝馬町に父貞吉、母ふみの四男として生まれる。父は元大垣藩士で当時農商務省に勤務。母は旗本秋山家に生まれ同じく幕臣の落合氏の養女として育つ。資夫は本名信秦。兄はすべて夭折、姉三人、弟二人、妹一人を持つ。

一八九〇（明治二三）年 五歳

この年の正月頃より父の厳しい折檻がはじまる。

一八九一（明治二四）年 六歳

私立井上学校に入学。この年の冬、母は父とのいさかいから家出（自殺？）を企てるが資夫に阻まれる。

一八九二（明治二五）年 七歳

この年、成城学校の教師から漢字を習う。

一八九三（明治二六）年 八歳

公立の四谷小学校へ転校する。

一八九四（明治二七）年 九歳

父が相手に手を出し失敗し、その上、行政整理にかかって農商務省を辞める。この年の十一月、父が以前世話をして家に入入りしていた「柴田の小父さん」に連れられて山形へ行く。

一八九五（明治二八）年 一〇歳

山形で正月を迎える。山形県立師範学校の附属小学校に転入。三月、同校の尋常科を卒業。四月、腎臓病をわずらい、そのため五月に帰京。帰郷後、四谷小学校高等科に編入。この頃から煙草を覚える。

一八九六（明治二九）年 一一歳

九月、父が台湾県庁に赴任する。七人の家族は母の実家に身を寄せる。

一八九七（明治三〇）年 一二歳

高等科の成績が悪いので蛟龍塾というところで勉強させられる。この頃、短刀や刀に興味を憶え購入する。また、信心深い母に連れられて浄土真宗の寺に説教を聞きに行く。

一八九八（明治三一）年 一三歳

実業の世界で身を立てることを父にすすめられ、砂糖問屋の小僧となる。。

一八九九（明治三二）年 一四歳

四月、長姉はるが画家の大下藤次郎に嫁す。大下と資夫はあまり仲良くなかったが、「芸術家」の義兄の存在は後の資夫に様々な影響を与えた。

一九〇〇（明治三三）年 一五歳

春、父が台湾から帰る。夏、砂糖問屋を辞め、十日程羅紗屋の小僧となるがそこも辞め、晩秋三越呉服屋店の小僧となる。この三越時代に紅葉・露伴の小説や田岡嶺雲の文章を読み、文学志望の意志を固める。露伴に弟子入り希望の手紙を書く。

一九〇一（明治三四）年 一六歳

四月中旬、弟子入りの希望を持って露伴を訪ねるが断られる。三越呉服屋店でストライキを計画し、指導者とみなされる。夏、脚気を理由に家に帰り、そのまま三越呉服屋を辞める。十一月、一ヶ月程簿記学校へ行く。

一九〇二（明治三五）年 一七歳

六月、日本橋薬研堀の歯科医富安晋の書生となる。ここから国民英学会に通い英語を学ぶ。富安塾でもドイツ語、漢文、修辞学、心理学等を学ぶ。この頃から泉鏡花の作品を耽読する。

一九〇四（明治三七）年 一九歳

四月、渡米を計画するがトラコーマのために断念させられる。富安塾も辞め、家を出てメリヤス職工になったり、絵草紙、絵葉書に彩色して自活する。この時、その後の十年間を運命づけた「原」という男と知り合う。絵草紙、絵葉書の仕事を手伝いに来ていた十四歳の少女常子に恋をし、激しい神経衰弱にかかり横浜に行く。自殺できず帰京し、早稲田で羊の牧場をしていた知人を手伝う。また、砲兵工廠の人夫にもなる。この頃『火鞭』を知り、社会主義に一時近づく。

一九〇五（明治三八）年 二〇歳

義兄大下藤次郎の紹介で万朝報記者の山県五十雄の経営していた東西社の雑誌『英学生』の広告取り、編集を手伝う。この頃、相場をやっている友人に出合って米相場を覚え、失敗する。

一九〇六（明治三九）年 二一歳

この年の暮、兜町の「大里」という店の手代となる。

一九〇七（明治四〇）年 二二歳

兜町の「加東」という店に移るが、金を儲けて女に夢中になったため店を出される。兜町にいられなくなって大阪の相場師を訪ねるが、その人に会えず、「鬼権」といわれていた金貸し木村権右衛門の手代となる。

一九〇八（明治四一）年 二三歳

大阪から帰京、牛乳屋の配達をしたり、自分で牛乳屋をする。

一九〇九（明治四二）年 二四歳

茨城県水戸市郊外で親戚の経営していた高取タングステン鉱山の事務員となる。

一九一〇（明治四三）年 二五歳

鉱山から帰り、再び兜町で三ヶ月ほど働く。

一九一一（明治四四）年 二六歳

五月、ある女と心中事件を起こし、女だけ死ぬ。傷が癒えた後、土方となる。十月義兄が亡くなったのを機会に土方をやめ、工場機関部のボイラー人夫となる。

一九一二（明治四五）年 二七歳

春、「愚劣な間違い」（『転々三十年』）、「無茶苦茶な真似」（『簡単な過去』）をして未決囚として拘置所に入る。拘置所を出て後、材木担ぎ、折箱屋の職人、魚河岸の軽子やポテフリの魚屋をする。

一九一三（大正二）年 二八歳

古くからの知人宮田修の始めた「哲学の会」に加わる。

一九一四（大正三）年 二九歳

春、露店で『近代思想』を買い、大杉栄・荒畑寒村たちがやっていた「サンジカリズム研究会」のことを知り、参加す。五月、牛込区会議員に立候補していた坪谷善四郎（水哉）の選挙事務所で働く。この時宮地嘉六と知り合い、後一ヶ月程共同生活をする。この頃露店の古本屋を始める。夏、「坑夫」の未定稿「坑夫の死」を書く。宮田修の紹介で当時雑誌『国民文学』を出していた窪田空穂に読んでもらう。窪田は長編小説にすることを資夫にすすめる。十一月、宮田修の「哲学の会」に来ていた八木麗子（戸籍名八木うら）と結婚する。この年、『都新聞』の通信員となり、露店や鬼権のことなどを書く。

一九一五（大正四）年 三〇歳

二月、大杉栄、荒畑寒村らと『平民新聞』第四号を街頭配布する。五月（十三日）長男伸生まれる。この月リーフレット『労働者』を発刊し、資夫は編集人となる。『労働者』は二号で廃刊。六月、小石川水道町の故大下藤次郎の水彩画研究所に移り、ここで、大杉・荒畑らの「平民講演会」などを開く。十月、『近代思想』の復刊号発刊され、資夫はその発刊人となる（復活三月まで）。『近代思想』の保証金のため、都下調布町に移る。

報告文「労働社の傷害」『近代思想』（十二月）。

一九一六（大正五）年 三一歳

一月、処女作『坑夫』（<http://www.japanpen.or.jp/e-bungeikan/guest/pdf/miyajimasukeo02.pdf>）を、飲料商報社の社長高木六太郎の資金援助を得て、近代思想社より刊行。すぐ発禁となり紙型も押収される。二月（十八日）二男克生まれる。この年、田戸正春のやっていた上野観月亭で開かれた「平民講演会」で、大杉栄、青山菊栄らと検挙される。五月（二一日）、六月（四日）の「平民講演会」は小石川の宮嶋宅での開催を最後に解体する。

感想文「労働者の友に与ふ」『近代思想』（一月）。

書評「『貧しき人々』広津和郎訳」『近代思想』（一月）。

感想文「一種の手淫に過ぎない」『新社会』（九月）。

一九一七（大正六）年 三二歳

前年十一月九日におきた「葉山日陰茶屋事件」を直接の契機として、この頃より大杉たちと離反する。感想文「予の見たる大杉事件の真相」『新社会』（一月）。書評「陥穽を読む」『新社会』（六月）。小説「恨なき殺人」『新日本』（九月）。

一九一八（大正七）年 三三歳

この頃から九州長崎より上京した「原」に誘われて再び相場に手を出し、放蕩する。感想文「余の見たる鬼権」『変態心理』（一月）。

一九一九（大正八）年 三四歳

二月（二六日）長女玖生まれる。春頃より高島素之に英訳本の『資本論』の講義を週一回受ける。大杉たちの労働運動社とは仲違いをする。十二月、比叡山に辻潤・武林夢想庵を訪ねる。

一九二〇（大正九）年 三五歳

一月はじめ、東京を引き払い比叡山に移る。五月、加藤一夫に誘われ、大阪の自由人聯盟の講演会にて演説する。八月、妻と子供を東京に帰す。九月、比叡山より下山し東京で文筆生活に入る。小説「母と子」『新公論』（一月）。評論「山上より」『東京日日新聞』（三月一日～五日）。

小説「雪の夜」『新時代』（六月）。

小説集『恨なき殺人』（聚英閣、六月）。

小説「犬の死まで」『東京日日新聞』（十二月一日～大正一〇年三月十五日）。

小説「土方部屋」『解放』（十月）。

感想文「余りに優しい弱い人一宮地嘉六氏の印象一」『新潮』（十月）。

小説「暁愁」『新潮』（十二月）。

一九二一（大正一〇）年 三六歳

四月、高尾平兵衛、和田軌一郎、吉田一、後藤謙太郎らと労働社を結成し、新聞『労働者』を出す（編集人印刷人・吉田一。後、高尾平兵衛、殿水照之助に変わる）。『労働者』は大正一〇年四月一五日号から翌年五月二〇日号まで十号発行する。十一月（二六日）次女利生まれる。十二月、有島武郎、藤森成吉、秋田雨雀らと大阪に行き、露国飢餓救済募集の講演会で演説する。この年から『金の星』編集部の野口雨情に誘われて童話を書きはじめ。この年の暮、栃木県的那須で一人暮らしをするか。

評論「社会主義運動の現状」『新文学』（一月）。

小説「角兵衛の子」『新文学』（三月）。

小説「残骸」『大観』（三月）。

社会講談「国定忠治」『改造』（三月）。

評論「大杉栄論」『解放』（四月）。

評論「偶感独断録（上）(二)(三)」『労働者』（四月一五日・五月一五日・六月二五日）。

小説「閃光」『小説倶楽部』（五月）。

評論「断片」『東京日日新聞』（五月三十一日～六月三日）。

小説「さまよひ」『人と運』（六月）。

小説「失職」『解放』（七月）。

社会講談「竹川森太郎」『改造』（七月）。

感想文「比叡の雪」『種蒔く人』（十月）。

小説「赤いコップ」『文章倶楽部』（十月）。

小説「道草」『太陽』（十月）。

評論「断片」『東京日日新聞』（十月二〇日～二二日・二五日）。

童話「奇術師」『金の船』（十月）。

自伝「転々三十年」『文章倶楽部』（十一月）。

書翰「原観吾氏へ」『東京日日新聞』（十一月十二日）。

一九二二（大正一一）年 三七歳

四月、画家の工藤信太郎に誘われて房洲根本（現白浜町）に転居。根本では翌年の十月まで暮らす。

小説「虚脱者」『解放』（一月）。

評論「社会主義学説」『我等』（一月）。

評論「労働文学の主張」『解放』（一月）。

アンケート「一九二二年以後の趨勢」『改造』（一月）。

評論「第四階級の文学」（一月二八・二九・三十一日、二月一・二日）。

童話「銀の鞠」『金の船』（二月）。

アンケート「大隈侯人物評 侯と尼港問題」『大観』（二月）。

評論集『第四階級の文学』（下出書房、三月）。

童話「星になった友を子にした話」『金の船』（三月）。
社会講談『国定忠治』（金剛社、三月）。
童話「悪い易者」『金の船』（四月）。
小説集『犬の死まで』（下出書店、五月）。
社会講談「国定忠治」『労働週報』（五月一八・三一日、六月一四・二八日）。
小説「安全弁」『解放』（六月）。
小説「憎しみの後に」『報知新聞』夕刊（六月十三日～七月二二日）。
小説「憂鬱の家」『中央公論』（七月）。
感想文「自らを語る」『表現』（八月）。
社会講談「竹川森太郎」『労働週報』（八月二八日、九月二七日、十一月二一・二八日、十二月四日）。
小説「あこう鯛」『解放』（九月）。
評論「監獄部屋の話」『改造』（九月）。
童話「悪い王様と渦の話」『金の星』（十月）。
童話「石臼の土台のない村の話」『金の船』（十一月）。
自伝小説『裸像彫刻』（春秋社、十一月）。
アンケート「今年中一番私の心を動かした事」『中央公論』（十二月）。

一九二三（大正一二）年 三八歳

九月一日、根本にて関東大震災に会う。根本より上京するが、保護検束を受ける（四日頃）。この頃、白山の南天堂や三宜亭にアナキストたちと集まる。十一月（八日）三男秀生まる。
童話「水滸伝」『金の星』（一月～八月）。
アンケート「華族の「邸宅解放」に対する批判」『解放』（二月）。
小説「野呂間の独言」『新興文学』（三月）。
小説「迷乱」『解放』（三月）。
小説「旧主の来訪」『鈴の音』（四月）。
小説「ある部屋での話」『解放』（六月）。
小説「仮想者の恋」『東京日日新聞』（六月二六日～八月六日）。
小説「その頃のこと」『中央公論』（八月）。
感想文「富豪窟探検一大玄関と奥庭一」（九月）。
小説集『流転』（新潮社、十月）。
感想文「追憶断片一大杉栄追悼一」『改造』（十一月）。
小説「真偽」『改造』（十二月）。

一九二四（大正一三）年 三九歳

童話「水滸伝」『金の星』（三月～五月）。
小説『黄金地獄』（萬有社、五月）。

小説「二つの事件」『中央公論』（七月）。

小説「両面」『新小説』（七月）。

小説集『憎しみの後に』（大阪日日新聞社、七月）。

社会講談「竹川森太郎」『自由』（八月～十一月）。

日記「高萩赤城八月の日記」『文章倶楽部』（九月）。

随筆「不安憂鬱時代」『秋田魁新聞』（十一月七・九日）。

一九二五（大正一四）年 四〇歳

二月、水野葉舟のすすめで千葉県三里塚の開墾小屋にて近藤茂雄と暮す。三里塚生活は約二ヶ月で、東京に帰る。十一月、加藤一夫、新居格、江口渙、木村毅、辻潤、高群逸枝らと『文芸批評』を創刊する。

童話「太兵衛と極楽」『赤い鳥』（四月・五月）。

感想文「此頃の私の生活」『文章倶楽部』（五月）。

小説「非流行作家の受けた侮辱」『中央公論』（六月）。

談話「縁のない事、局外展望、」『東京日日新聞』（八月八日）。

童話「不思議な苴」『童話』（十月・十二月）。

評論「創刊の辞」『文芸批評』（十一月）。

小説「朽木」『文章倶楽部』（十二月）。

一九二六（大正一五＝昭和一）年 四一歳

童話「三人の片輪が大蛇を退治した話」『金の星』（一月）。

小説「山の鍛冶屋」『解放』（二月）。

感想文「雑信寸評」『解放』（二月）。

感想文「当り前のこと」『文芸批評』（二月）。

詩「無題」『文芸批評』（二月）。

童話「生笹」『赤い鳥』（二月）。

感想文「憐れなる彼の繰言」『文芸行動』（三月）。

評論「矛盾だらけ」『不同調』（四月）。

童話「蠅取りベンベクス」『金の星』（四月）。

長篇小説『金』（萬生閣、四月）。

小説「海辺追憶」『地方』（五月）。

小説「疲れた人々」『中央公論』（五月）。

童話「仁王の力」『赤い鳥』（五月）。

小説「期待」『小説倶楽部』（六月）。

小説「悪夢」『虚無思想』（六月）。

随筆「創作素材―墓穴を掘つて素薬を仰いだ女の話―」『サンデー毎日』（六月一五日）。

評論「断片語」『東京日日新聞』（七月二六・二七日）。

小説「誤算」『新潮』（九月）。

評論「時評一独断(一)(二)(三)(四)」『東京日日新聞』（十月一六・一七・二一・二二日）。

随筆「マソ自嘲」『新潮』（十一月）。

評論「文芸時評(一)(二)(三)(四)」『東京日日新聞』（十一月一六日～一九日）。

随筆「殻」『サンデー毎日』（十一月二八日）。

感想文「私が本年発表した創作に就いて」『新潮』（十二月）。

随筆「ヌマ・ポンペリヤスと十二月」『不同調』（十二月）。

感想文「予は何新聞を愛読するか一及びその理由」『新潮』（十二月）。

小説「開墾小屋」『世界』（十二月）。

童話「郭將軍」『赤い鳥』（十二月）。

評論「文芸時評(一)(二)(三)(四)」『東京日日新聞』（十二月一七日～一九日・二一日）。

一九二七（昭和二）年 四二歳

一月（二九日）、文芸解放社主催の文芸講演会で壺井繁治、工藤信太郎と共に講演する。三月（十三日）三女明生まれる。同月一日父貞吉死亡。

評論「銀紙細工礼讃」『美術評論』（一月）。

翻訳『田園の悪戯者』（アルス、一月）。

小説「乗合」『中央公論』（二月）。

評論「世迷言」『近代風景』（二月）。

随筆「好いものを待つ一農民文学について一」『文芸』（二月）。

童話「蟹や蛇」『金の船』（二月）。

座談会「新潮合評会」『新潮』（三月）。

童話「鳥が宝になった話」『赤い鳥』（三月）。

随筆「夢想者漫談」『経済往来』（三月）。

評論「文芸時評(一)(二)(三)(四)」『東京日日新聞』（三月一五日～一八日）。

随筆「断片」『不同調』（四月）。

座談会「新潮合評会」『新潮』（四月）。

感想文「取り止めのない話一泉鏡花の作品について一」『文芸時報』（四月二一日）。

童話「あたらぬ占」『赤い鳥』（五月）。

随筆「食物の連想」『サンデー毎日』（五月一五日）。

評論「文芸時感(一)(二)(三)(四)」『東京日日新聞』（五月二〇日～二二日・二四日）。

随筆「断想一父の死と通夜の晩の話一」『不同調』（六月）。

感想文「追憶断片」『文芸公論』（七月）。

感想文「漫言」『新潮』（七月）。

評論「断想`文芸時評、(一)(二)(三)(四)」『東京日日新聞』（七月一九日～二二日）。

小説「或る出来事」『新潮』（八月）。

童話「銚の庄吉」『赤い鳥』（八月・九月）。

随筆「自殺雑感」『不同調』（九月）。

小説「闇」『自由評論』（九月）。

評論「断想 文芸時評、(一)(二)(三)(四)」『東京日日新聞』（九月一六日～一八日）。

童話「平三の藁」『金の船』（十月）。

紀行文「大東京繁盛記一四谷・赤坂」『東京日日新聞』夕刊（十月四日～九日）。

随筆「幸福とは」『不同調』（十一月）。

童話「マカオの死」『赤い鳥』（十一月）。

評論「断想一古ぼけた思想一」『東京日日新聞』（十一月一〇日～一三日）。

随筆「食餓鬼断想一 味覚極楽、読後の感一」『サンデー毎日』（十一月一三日）。

感想文「私が本年発表した創作について一何も書けなかった」『新潮』（十二月）。

日記「日記一ある日の日記(四)一」『新潮』（十二月）。

感想文「僕の体験」『騒人』（十二月）。

アンケート「貧乏百家論」『騒人』（十二月）。

一九二八（昭和三）年 四三歳

七月、雑誌『矛盾』を新居格、草野心平、辻潤、小川未明、五十里幸太郎、宮山栄之助らと創刊。『矛盾』は昭和五年二月まで合計八冊刊行される。

感想文「明日への希望」『中央公論』（一月）。

童話「清造と沼」『赤い鳥』（一月）

(http://www.aozora.gr.jp/cards/000929/files/46984_30974.html)。

感想文「辻潤を送る」『悪い仲間』（二月）。

童話「人間は怖い」『赤い鳥』（三月・四月）。

評論「進出した新興文学ープロ文芸に就てー」『東京日日新聞』（三月一九日）。

随筆「人間随筆 その(一)辻潤」『サンデー毎日』（三月一八日）。

随筆「人間随筆 その(二)鬼権・松辰」『サンデー毎日』（三月二五日）。

随筆「人間随筆 その(三)和田久太郎」『サンデー毎日』（四月一日）。

戯曲「機関室」『新潮』（四月）。

感想文「受売の受売」『悪い仲間』（四月）。

感想文「前田河広一郎君に就いて」『新潮』（五月）。

感想文「長江氏の感想に就きその他」『不同調』（五月）。

評論「文芸時評(一)(二) (完)」『読売新聞』（五月二・四・五日）。

評論「偶感一二(一)(二)(三)」『時事新報』（五月五日～七日）。

評論「政治・文学ーメーデーの日にー」『悪い仲間』（六月）。

評論「歓喜と苦痛とー自分の小説についてー」『新興文学』（六月）。

評論「憂鬱を罵る」『時事新報』（六月一四日～一七日）。

評論「矛盾」『矛盾』（七月）。

感想文「雑」『矛盾』（七月）。

童話「島を釣った話」『赤い鳥』（七月）。

感想文「国家の文芸家表彰に就いて」『新潮』（七月）。

童話「消えない火」『赤い鳥』（八月）。

感想文「此の頃の感想(一)(二)(三)(四)」『時事新報』（八月二十九日～三十一日、九月一・二日）。

随筆「事大主義的理論を排す」『矛盾』（九月）。

感想文「「もどかしく」の読後」『不同調』（十月）。

感想文「反動の役割か」『新潮』（十月）。

童話「天女と悪魔」『赤い鳥』（十月）。

感想文「私が本年発表した創作に就いて」『新潮』（十二月）。

日記「日記一ある日の日記(三)一」『新潮』（十二月）。

小説「長崎異聞蓮華十字」『平凡』（十二月～四年三月）。

一九二九（昭和四）年 四四歳

辻潤から絶交を言いわたされる。

連作合作小説「恋のまぼろし」『文芸ビルディング』（一月）。

童話「海賊と大砲」『赤い鳥』（一月）。

評論「文芸時評一二月の雑誌一」『読売新聞』（二月二日～八日）。

小説「彼の哄笑」『新潮』（二月）。

小説「階梯」『中央公論』（二月）。

感想文「先づ生活に」『文章倶楽部』（二月）。

小説「煙突」『文章倶楽部』（三月）。

感想文「小児病患者とは」『矛盾』（四月）。

随筆「人間随筆 (一)雨敬と福桃」『サンデー毎日』（五月二六日）。

詩「朝」『矛盾』（六月）。

感想文「無題言」『文芸ビルディング』（六月）。

随筆「人間随筆 (二)三宮先生」『サンデー毎日』（六月九日）。

随筆「人間随筆 (三)東屋古満之助」『サンデー毎日』（六月二三日）。

随筆「人間随筆 (四)労働社の人々・有島武郎に就いて」『サンデー毎日』（六月三〇日）。

随筆「人間随筆 (五)大下藤次郎」『サンデー毎日』（七月一四日）。

翻訳『田園の保護者』（アルス、七月）。感想文「雑感」『文芸ビルディング』（十月）。

随筆「株式市場の一日一時代探訪五景」『新潮』（十月）。

小説「片影」『新潮』（十一月）。

小説「流浪者の手記(一)」『矛盾』（十一月）。

詩「酔中吟」『矛盾』（十一月）。

感想文「昭和四年に発表せる創作評論に就いて」『新潮』（十二月）。

一九三〇（昭和五）年 四五歳

四月、友人「早川」のすすめで京都旅行をする。京都の笹井末三郎の誘いで天龍寺を見物し、禅宗寺の雰囲気にはかれる。五月、妻麗子の賛成も得られ、天龍寺入門のため京都へ行く。最初は笹井の父が寄附して建てた嵯峨の毘沙門堂から通禅する。この頃、弟の友人で大本教信者の誘いで大本教主出口王仁三郎に会う。十月、得度式を得て、十一月、天龍寺の僧堂に入る。

小説「流浪者の手記(二)」『矛盾』(二月)。

翻訳『田園の悪戯者』(アルス、二月)。

随筆「金・数態」『福岡日日新聞』(二月二一日～二四日)。

感想文「春陽会寸評」『みずゑ』(五月)。

翻訳『農業科学の話』(アルス、七月)。

評論集『仏門に入りて』(創元社、十二月)。

一九三一(昭和六)年 四六歳

小説「典籍」『大衆文芸』(二月・三月)。

一九三二(昭和七)年 四七歳

仏教書『禅に生きる』(大雄閣、十一月)。

一九三三(昭和八)年 四八歳

一月、東京に一時帰る。

感想文「心境を語る」『京都帝国大学新聞』(二月二一日)。

感想文「田舎から見た東京—東京の圧力—」『人物評論』(十一月)。

仏教書『続禅に生きる』(大雄閣、十二月)。

一九三四(昭和九)年 四九歳

随筆集『雲水は語る』(大雄閣、二月)。

一九三五(昭和一〇)年 五〇歳

この年『華嚴経』執筆のため再び東京へ戻るが、完成後、笹井末三郎の兄静一のすすめで嵯峨の笹井家別荘に移る。

仏教書『華嚴経』(大東出版社、三月)。

感想文「愁想」『京都帝国大学新聞』(十月二六日)。

一九三六(昭和一一)年 五一歳

五月、友人宮山栄之助の知り合いの寺のある秩父へ行脚に行く。この頃より宮山栄之助に生活援助を受ける。妻麗子、過労のため前年に発病した結核を悪化させ、中野の療養所、愛知県知多半島へと転地療養を続ける。

随筆「臘八接心」『大法輪』(十二月)。

一九三七（昭和一二）年 五二歳

五月十三日、妻麗子死去。この年、家主の娘と恋愛する。十月、埼玉県大和田町平林寺半僧坊の堂守となる。

感想文「心に飛行機を」『京都帝国大学新聞』（一月二〇日）。

一九三八（昭和一三）年 五三歳

八月、満州へ渡った長男伸と別れて一人で帰国した三男秀と平林寺にて生活する。

随筆「平林寺から」『大法輪』（六月）。

随筆「堂守雑筆」『大法輪』（十一月）。

一九三九（昭和一四年） 五四歳

随筆「堂守随筆」『大法輪』（一月）。

随筆「堂守随筆」『大法輪』（三月）。

一九四〇（昭和一五年） 五五歳

感想文「仁王禅を説いた鈴木正三」『大法輪』（十月～一六年九月）。

一九四一（昭和一六年）年 五六歳

十二月中旬、大法輪閣社長石原の頼みで、岐阜で発狂した高橋新吉を迎えに行く。

仏教書『新編禅に生きる』（大法輪閣、二月）。

童話集『たのしい童話集』（金の星社、八月）。

一九四二（昭和一七年）年 五七歳

二月、大法輪閣顧問となる。六月、正法眼蔵講話を聞くため永平寺に行き、一ヶ月余滞在。一旦帰京後、八月その時の講師吉岡鉄禅氏について、正法眼蔵参究のため静岡県藤枝郊外の石雲院に二ヶ月程滞在し、十月再び京都（慈濟院）に帰る。

感想文「大東亜経論と仏教」『大法輪』（三月）。

一九四三（昭和一八年）年 五八歳

六月、慈濟院の末寺遠塵庵に移る。仏教書『坐禅への道』（堀書店、一月）。

仏教書『勇猛禅の鈴木正三』（大法輪閣、十二月）。

一九四六（昭和二一年）年 六一歳

この年『正法眼蔵』に関する著述を完成（未刊）。

一九四七（昭和二二年）年 六二歳

童話集『底無山』（黎明社、十月）。

一九四八（昭和二三）年 六三歳

二月、九州の娘婿吉田達磨宅で二ヶ月ほど神経痛の養生をする。この頃、「仏教入門」の著作を依頼され、久しく遠ざかっていた浄土系の仏典に接し、次第に浄土真宗に帰依す。

一九四九（昭和二四）年 六四歳

一月七日、母ふみ死去。この年から胃潰瘍の徴候あらわれる。七月はじめ、病院に入院、八月手術をする。九月十八日帰庵。

随筆「ありのまゝ」『親鸞』（十一月）。

一九五〇（昭和二五）年 六五歳

一月、『遍歴』（原題『真宗に帰す』）の執筆を始め、五月に完成する。

一九五一（昭和二六）年 六六歳

二月十九日、京都嵯峨の遠塵庵にて、三男秀に看取られて死去。享年満六四歳六ヶ月と一八日。

評論「日本自由恋愛史の一頁一大杉をめぐる三人の女一」『文学界』（五月）。

一九五三年（昭和二八）年

自伝『遍歴』（慶友社、八月）。